

阪神北地域夢会議 会議録

- 1 テーマ：住みたい街はどんな街？～2030年に住みたい、住んでいたい街を語ろう！～
- 2 開催日：平成31年2月11日（月・祝）13:00～16:00
- 3 場 所：伊丹市スワンホール
- 4 出席者：86名（ビジョン委員21名、一般42名、来賓5名、専門委員3名、
アドバイザー2名、オブザーバー4名、兵庫県9名）

5 内容

(1) 開会（13:00～13:30）

(2) グループ討議（13:35～14:55）

行動目標1「多様で個性的なライフスタイルを育むことができる社会をつくる」

議題：地域づくり（A・B）、多文化共生、ワークライフバランス

行動目標2「自律と協働による温かいコミュニティをつくる」

議題：子育て、防災・減災、高齢者

行動目標3「自然と豊かに調和した安全・快適な都市環境を創造する」

議題：自然との共存

行動目標4「豊かさにとぎわいを創出する新たな阪神経済を展開する」

議題：起業、地域の魅力発信

(3) 全体会（15:00～16:00）

○グループ討議発表

<地域づくりA>

（現状・課題）

- ・自治会での役割が回ってきたときに自治会を辞めてしまうことなどによる自治会員の減少。
- ・地域間のつながり、近所同士のコミュニケーションの希薄化。
- ・高齢化に伴う少子化や空き家の問題の発生。

（解決策）

- ・キャリアを持つ人の協力を得るなどして、共通の目的を持った人同士で物事に取り組むことで高齢者の居場所をつくる。
- ・子どもに対する取り組みとして、自治体は今よりさらに学校と連携をとり、保育問題や待機児童の問題、子供の居場所づくりに取り組む。
- ・自治体、NPOに相談しやすい協議の場をつくる。
- ・里山のような自然を活用して特色ある地域づくりを行う。

<地域づくりB>

（現状・課題）

- ・人と人のつながりが減少。例えば、バス停で出会った人同士が会話をしないことや、地域行事に子どもが参加しないことなど。

(解決策)

- ・3世代交流を促進する。
- ・具体例として、自治会に子ども会をつくる。まずはきっかけづくりとして餅つき大会のような子どもたちが楽しいと思えるような目玉を作る。そうすることで子ども同士の友達関係、子どもとおばあちゃん世代のつながりができる。そういった地域性をつくりたい。
- ・そのほか、子供との関わりを持つといったご年配の人の生きがいがづくりも必要。
- ・今日も会いたい人がいる、やることがある。そんな街にしたい。

<多文化共生>

(現状・課題)

- ・教育方法や文化、言語の違いに対応できず、仕事に就きにくい、就いたとしても働きにくいという問題が生じている。
- ・阪神北地域に住む人々は、自身が住む街について外国人から尋ねられたとき、答えられる情報を持っているか。

(解決策)

- ・相互理解（コミュニケーション）を深めることによって、暮らしやすさ、居心地の良さとなり、解決につながるのではないかな。
- ・外国人と日本人がお互いに住みやすい街を作るためには文化、習慣、教育の違いを知る必要がある。まずは私たちが自身の住む街について知っておくために、若者にとって薄れがちな文化、伝統、郷土料理等を高齢者から若者へ伝えていくことが必要。一つの手段として、地域内の伝統や郷土料理を学校で学ぶのはどうか。
- ・そのほか、語学よりも五感で語り合うことが大事。例えば農業を一緒に行うといった共同作業の場をつくることで、楽しさを分かち合うことができる。
- ・これらのことがうまく連鎖でつながることで暮らしやすさ、居心地の良さにつながっていくのではないかな。相互理解を中心に好循環をつくっていく必要がある。

<ワークライフバランス>

(現状・課題)

現状、下記の4つの課題がある。

- ・企業側の意識の問題
- ・つながりの希薄化
- ・個人の能力の問題
- ・長時間労働による子育ての充実の難しさ

これらの課題は制度面、つながりの面、企業側や個人の意識の面に分けられ、それぞれ以下のような具体的な課題があると考えられる。

- ・制度面・・・女性の社会進出の妨げの原因となっている幼稚園や保育園の数の少なさ。
- ・つながりの面・・・娯楽が人とのつながりではなくスマホの中だけで完結している。
- ・意識の面・・・効率の悪さ、時間内に仕事を終える意識の低さ、それに伴う長時間労働。

(解決策)

- ・制度面・・・在宅ワークの推進
- ・つながりの面・・・地域イベントの実施
- ・意識の面・・・効率良く働く意識を持つ

<子育て>

(現状・課題)

- ・両親の負担が増えている。仕事が忙しいため、子どもと関わる時間、子育てにかかる時間が少なくなっている。
- ・安心して子育てできる場所が少なくなっている。
(例) 核家族化が進んだことによる孤独
子ども同士で安心して遊べる場所の少なさ
小学校の授業後の預けられるところの少なさ

(解決策)

- 働き方、意識の両面からの改革が必要。
- ・働き方の面・・・外国人の労働者を増やすこと、子供に向き合う時間を増やすことに取り組むべき。そのためには地域のサポート、ボランティアの方の力が必要。
- ・意識の面・・・社会活動やボランティアの必要性の意識を取り戻すことに取り組むべき。子どもは学校で社会活動やボランティアが大事だと教えられ、その必要性は社会人も知っている。しかしながら、自分たちの生活にとらわれて忘れがちとなっている。意識を取り戻す取り組みが必要。

<防災・減災>

(現状・課題)

- ・住民の意識として、地震は来ないという思い込みがある。
- ・自助が大事という意識が足りない。

(解決策)

- ・行政による公助、自らを守る自助、周りを助ける共助
この3つのキーワードを意識する。
- ・特に自助。私たちは自分で自分を守っていかなくてはならないという意識を持つことが重要。
- ・自助、共助が確立されている街をつくっていく必要がある。

<高齢者>

(現状・課題)

- ・環境面・・・世代間のつながりの弱さ、世代を超えた小学生や若者、高齢者との交流の場の少なさ。
- ・安全面・・・孤独死、安心して暮らせる場の減少。
- ・費用面・・・社会保障費の高騰、年金だけでのやりくりが難しい。

(解決策)

- ・自治会への参加を促進することで環境面と安全面の課題が解決できるのではないかと。
 - ・環境面・・・公共施設、公民館は個人では利用しにくいですが、自治会だと利用しやすい。自治会に加入することで交流の場ができる。
 - ・安全面・・・自治会加入により地域でのつながりができ、孤独死の防止、安心して暮らせる地域づくりにつながる。

<自然との共存>

(現状・課題)

- ・イノシシや鹿が町中に入ってくることや、川の鮎の数が少なくなっているなど、自然環境が変わってきている。そうした中でどのように自然環境を守っていくか。
- ・農業を行う方が減っている中で、休耕地をどう活用していくか。

(解決策)

- ・休耕地は市民農園に活用してはどうか。地産地消により他地域から運ぶエネルギーを減らすことができ、地球の温暖化を防ぐことにつながる。現在学校給食で実施されているが、それ以外でも行っていくべき。
- ・また、里山を守っていく保全活動も行っていくべき。里山以外にも町山という言葉がある。身近に昔からある神社や森といった身近なところの自然を楽しむことも必要だ。
- ・そのほか、イノシシや鹿といったジビエ料理の推奨や子供たちが自然を体験するといった自然をアピールするイベントを行っていくべき。

<起業>

(現状・課題)

- ・両親や学校の先生も含めて、起業の支援者、理解者が少ない。もっと協力者が必要。
- ・このまま事業を続けられるかという将来性に不安を感じる。
- ・競合過多や企業者の流出も課題で、神戸や大阪が近いために地元で活躍する人が少ない。
- ・ボランティアが少ないために、資金調達が難しい。

(解決策)

- ・若いうちから地域に愛着を持つためには、人のつながりがポイントになる。
- ・また、モノがあふれている今の時代では個性を売りにしていくことも大事。

<地域の魅力発信>

(現状・課題)

- ・地域の交流の場の不足や、その未活用。
- ・地元の人が地域の魅力に気づいていない。

(解決策)

- ・インフルエンサー（すぐ移るインフルエンザが語源）の活用を提案。そのほか、ユーチューバーやティックトッカーといった、インターネットを通じた情報発信者も活用していくべき。
- ・イベントを人とのつながりのきっかけにする。
- ・言葉の使い方、情報の提供方法を分けるなど、発信の仕方を年代に合わせることも必要。
- ・そのほかコワーキングスペースも活用を増やしていくべき。
- ・三田市は高校生の学生ワークショップといった学生が活躍できる環境があり、起業しやすい。
- ・夢に向かって活動しやすい街、やりたいことをやりやすい街にし、兵庫県で一番いい街は阪神北と言えるようにしていきたい。

○専門委員コメント

(芳田委員)

- ・今回のテーマは「2030年に住みたい街を語ろう」ということで、約10年後を考えてもらったが、逆に10年前どうだったか。今やiPhoneやiPadは当たり前になっているが、10年前はほとんど普及していなかった。

- ・これから10年後、4Kから5Kに、手術も遠隔でできる、車の運転は自動運転になるという時代が来るかもしれない。
- ・技術は日進月歩で進んでいるが、その中で人と人とのつながりが薄れていることが課題だ。
- ・ツールとして10年後にはボタン一つで人がつながる時代が来るかもしれないが、「人と人」「あの人が」といったアナログな、フェイス to フェイスなつながりがないと、住みたい街にならないのではないか。どのようにつながりを持って、住みたいと思うか考えてもらいたい。
- ・また今日話し合ったことを形にしていくことも必要だ。自治体や議員の先生が施策に反映させていくことに加えて、話し合った皆さんが地域に持って帰ることもお願いしたい。

(今井委員)

- ・グループ討議の内容について、個々のトピックが独立してしまっていたので、関連性があった方がさらによかった。
- ・多文化共生については、外国人がどういう目的で日本や阪神北地域に来ているかを考えられたらよかった。例えば、留学や仕事等。
- ・自然との共存については、農作物の被害や獣害をなくすという議題もあったが、農業のあり方と密接に関係しているため、その現場だけを見てはいけない。自然への親しみ、知識を意識してもらいたい。

(滋野委員)

- ・約10年後を考えたとき、10歳の子が20歳になることを考えると、教育がポイントになってくる。教育については、「共育（ともにそだつ）」ことも意識していくべき。
- ・私たちは行動範囲を地域と考えるが、考える地域はこの範囲でいいのか。他地域から来た人が阪神北地域を見たときに今のままの地域でいいのかという視点も必要。
- ・「住みやすい街はどんな街？」を考えたとき、65歳以上の人の健康、経済、環境といった不安がない街がいい。
- ・好きなことをして好きなことをやれる街、それで食べていける街。それが住みやすい街と言えるのではないか。
- ・いいものをつくるには、新しいものと古いものの融合が必要。新しい関係づくりも今後重要になってくる。
- ・また、行政が10年後どういう役割を担っているかも課題。

市民参加型という聞こえはよいが、実体は行政のサービスが落ち、市民自らがやらなければならないようになったから。まだまだサービスの補填や見える化ができておらず、継続化もできていない。行政は現状を見直すとともに、市民と一緒に課題に取り組んでいかなければならない。